

ペスタロッチにおける政治と教育 (1)

大久保哲夫

序章 研究の視点

いまかりにペスタロッチ (J. H. Pestalozzi) の広範な実践活動と著作活動をつらぬく課題は何かとたずね、結論をさきにだすなら、それは貧民の救済、民衆の教化、さらには社会の改善であったと答えるべきであろう。そのことをあきらかにするために、まずペスタロッチの生まれたスイスおよびチューリヒの政情を略述しておこう。

^{注1}
ルネッサンスに端を発した西欧近代化の政治における烽火は、1642年、王権神授説を固執し民意を無視したイギリスのチャールズ一世処刑に始まった。このいわゆる第一革命による共和国成立の思想は、やがて1776年にはアメリカの独立戦争となって飛火し、1783年のアメリカ独立、続く1789年には、国王の専恣と窮乏に耐えかねたフランス国民にフランス革命を勃発させたのである。かかる一連の政治的動向は、ペスタロッチの祖国スイスをも動揺させざるをえなかった。とくにアルプスの山岳地帯にあってたえず周囲の強国からの侵略の危機にさらされていたスイスでは、自由と独立と祖国愛が伝統的精神として培われており、それが時代思潮に刺激されて国民の精神は活気に溢れていた。

たとえば国民の下層階級をなす農民においても、隣国ドイツの1525年の農民戦争や1618年の30年戦争の影響から、1653年にスイスに一大農民戦争が起きた。それは都市と農村の社会的・経済的闘争であったといえよう。なぜなら当時は、種々の名目による重税と都市商工業の勃興にとまらぬ資本の都市への集中化とが、農民を隷農の窮地へと追いこんでしまっていたからである。また貴族の民衆への圧迫もいっそう増大し、それに対し1747年にはベルンで反乱が起こ

り、フライブルグにおいても1781年に民衆は暴動を起こしている。

こうした民衆の権力者に対する幾多の抵抗は、スイスの政治もまた当時のヨーロッパに蔓延していた絶対主義に毒されていたことを示すものである。それはスイスにおいても全国的に波及し、諸カントン (Kanton州) でいわば政府による専制政治が行なわれていた。それはスイスの伝統的民主政治の外形が残存する中部スイスの田舎のカントンにおいてさえみられた。ここではカントンで最高の権限を有する住民の一般集会 (Landsgemeinde) には特権階級のみ参加でき、一般住民は従属的地位にとどまっており、そうした市民の特権団体によるやや広範な寡頭政治の中でカントンの役人や外国諸侯から年金を貰う外国出稼ぎの士官がさらに狭い寡頭政体を形成していたのである。工業都市においてもまた事情は等しく、最高権力を有する職人組合は次第に特権階級に限定され、そこからさらに狭い寡頭政体が作られていた。また職人組合の存在しないところでは数家族により構成された貴族階級が権力を掌握し、都市と農村の住民を統治していた。当時のスイスにはカントンにもその同盟地方や従属地方にもさながら一連の滝のように特権者があり、この特権的排他主義はいくつかの革命運動を招来したのであった。

これをペスタロッチが直接呼吸し体験したチューリヒについてやや詳細に考察を加えるなら、チューリヒは1336年以来組合制度を基盤とする憲法により統治され、行政組織は枢密院 (大評議会より12人)、大評議会 (小評議会より22人) および小評議会 (各組合員より会員数に応じて50人) より構成されていた。しかしそこでも特権階級が生まれ、かれらが政治を壟断していた。地方は評議会により任命された代官が支配して

いたが、地方政治は厳格をきわめ地方民は奴隸の身分に甘んじなければならなかった。地方民は都市の繁栄の犠牲にされ、かれらには市民と同等の権利は与えられなかったのである。

そのころ少年ペスタロッチはチューリヒに近いヘンクという村で牧師をしている祖父を訪ね、チューリヒ市民が近郊の農民を虐待していることや、町で独占的商業を行ない近在の農民の欲する市民権を拒否しておりさらにそれに対し農民が極度の不平を抱えていることを知った。かれはまたしばしばチューリヒに近いリヒタースワイルの叔父のところへ行き、そこでも農民がヘンクの農民と同じ圧迫を受けていることを知った。「私は大きくなったら農民を助けよう、彼らは町の住民と同じ権利をもたねばならないのだ」と叫んだ若きペスタロッチの心中には、社会^{注2}の不正と闘い民衆を救済しようという気迫がすでにみなぎっていたのである。^{注3}

当時のチューリヒには活潑な政治活動がみられた。しかも「周知のように、チューリヒ市民の注意を社会問題に向けたのはジェネヴァであった。ジェネヴァの市民は第17世紀の末葉から次第に多数の雄弁な弁護者を得た国際法と市民的自由とに関する思想を实际生活に移そうとした。その思想は一方総ての天真な公平な人々の叫び、若しそれを与論と言い得べくんば与論を味方にもち、他方権力のあるすべての人々を敵にもった。このようにして『ジェネヴァは今』とボドマーは書いている『最も自然な最も正しい最もよい政治の学校だ』と」。カルヴィン(J. Calvin)やルソー(J. J. Rousseau)を生んだジュネーブの政情に刺激されて自由と正義の精神の充満していたのは、ボドマー(J. J. Bodmer)など優れた教育者のいるチューリヒの人文学校(Collegium humanitatis)であった。ペスタロッチもそこに学び、「自主、独立、善行、犠牲心、祖国愛」をモットーに衰退したスイス精神を再起させようという理想に生きていた。^{注5} 1762年に出版されたルソーの「エミール」„Emile”と「社会契約論」„Contrat social”は純真な青年の心にいっそうの刺激を与え、かれはボドマーの指導するスイス協会(die helveti-

sche Gesellschaft)に参加して、政治、社会、道徳問題の研究や啓蒙活動を行なった。

ここで、ペスタロッチの最初の著作といわれている「アギス」„Agis”(1765年)により、当時のかれの思想を考察してみよう。この「アギス」には「デモステネスの民衆に対する第三オリュントス講演の一部の翻訳」という短いギリシャ語の翻訳が前におかれている。それはいわば「アギス」の物語の序説ともいべき部分であり、そこでデモステネスはギリシャが長期間国民の幸福に役立った古来の生活の単純さと美德を失ったことを次のように嘆いている。かつて国家の支配者はすべて「公共の財産の増大のみを自己の義務と信じ」、私生活では欲望を制限して質素な生活を営んで市民の幸福に務め国家の繁栄をもたらした。しかるに現在、支配者は逆に公共の事業により自己の富を増し、権力を独占して国民を犠牲にさらしている。「かつては民衆が国家の支配者に対して大きな権力を有し、全財産の所有者であった」のに、現在では「市当局そのものが全財産の所有者であり、すべてはかれの恣意により行なわれている」。すなわち財産と権力の不平等が出現し、^{注8}専制政治へと移行してきたのである。それは当時のスイスの政情と酷似しており、そのためペスタロッチはわざわざ「われわれの状態に対する諷刺ではない」と断っているほどであるが、^{注9}ホイバウム(A. Heubaum)も指摘するように当然そこにはかれの主張が含まれているとみなすべきである。^{注10}

そのことは翻訳に続くアギス王の物語においていっそう明瞭となる。アギスは素朴な徳の失われた時代のスパルタの国王であった。当時スパルタではリュクルゴスの法律は尊重されておらず、スパルタの精神的支柱をなす節制と勤勞という徳はずでに無用のものとなっていた。その結果市民の間に財産と権力の不平等を生じ、権力者は富と享樂生活を求め国家は滅亡の危機に瀕していた。なぜなら「祖国、独立、真理、誠実など生命そのものよりもっと価値ある財産」を貪欲な国家は黄金のために犠牲にしていたからである。かかる状況において即位したア

ギスは、「祖国の救済を決心し、自己の法律を祖国の最初の立法の基礎の上に第二のリュクルゴスとして再建しようと決心した」^{注12}。それは法律の復活により、立法精神の基礎をなしいかなる時代の人間の内面にも奥深く存する徳(Tugend)が市民の生活に蘇生するということをかれが知っていたからである。とくにかれは、市民の不平等こそ支配服従・奢侈享楽という社会墮落の源泉であることを観取し、「スパルタ市民の間に完全な平等(die vollige Gleichheit)を再び導入しようと決心した」のである。やがて青年たちの間に正義と自由への愛が覚醒されたが、^{注13}富者を中心とする反動勢力はアギスの政治に反対し、外国出征中に勢を得た暴君レオナダスにより遂にアギスは死刑に処せられた。

この物語に含まれているペスタロッチの思想について論じるなら、物語はまず国家を没落へと追いやった混乱した社会状態の確認から始まっている。この混乱は経済的な性格と道徳的な性格を帯びるものであり、権力者の財産欲と感性的欲望が民衆生活の圧迫と道徳的な退廃を惹起するものである。かかる社会を再建する理想は旧い秩序とそれを維持した道徳にあり、しかも旧い法律の単なる復活ではなく求むべきはむしろその精神にある。ペスタロッチは単に外形的・制度的なものに目を向けたのではなく、人間の内面的な再建を目標としたのである。また、こうした社会改革の必要性は指導者により意識され推進されていることにも注目しなければならない。当時は支配者と国民は家父長的な関係にあり、したがって国家の指導者が国家に対して責任を負うのが当然とされ、社会改革の推進者としては民衆よりも支配者が重要視されていたのである。なお法律学専攻の学生であったペスタロッチが法律により民衆の道徳的向上を志向している点も、今後のかれの思想を考察するに重要なことがらである。

さてその後のペスタロッチの人生を素描しておく、学生時代に当時の政情の影響を受けて神学専攻から法律学専攻へと転じたペスタロッチは、実践活動に対する市当局の圧迫に官職につく希望を失って法律学を断念し、畏友ブルン

チュリーの死の直前の忠告や重農主義の影響もあってノイホーフの野を耕し、農業経営が不振になると貧児教育を始め、経済的困窮から再転じて著作生活に入るなど、幾度転を経たのち50歳を過ぎてから初等教育の研究に専念したのである。しかもその間たえずかれの脳裏にあったのは青年時代にひどく感動した下層の民衆であったことはいうまでもない。かれはそれをのちに「わたしの心は青年時代から力強い流れのように、ただ周囲の民衆の陥っている不幸の源泉を塞ぐという目標に向ってのみ沸き立っていた」と述べており、かれの広範な活動は、レーマン(B. Lehman)が「ペスタロッチは農業、工業、法律、財政論、国家論、教育論、道徳論に没頭した。これらの諸領域は民衆教育という理念のもとに総括すれば最も適している」ということばで端的に示しているように、^{注14}民衆の救済と教化につらぬかれていたのである。なかんずくペスタロッチをして後世に名をなさしめた基礎教授法の研究においてさえ、その代表作「ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか」^{注15} „Wie Gertrud ihre Kinder lehrt.” (1801年)の冒頭で、「民衆教育を眼前に無限の沼のように眺め、その沼の中を苦勞して歩き廻り、やっとその水源、閉塞の原因、湿っぽい腐敗物を他に導く可能性の予感される点を知るに至った」^{注16}と述べているように、それは窓のない陋屋の不快感暗闇の中に放置され、上階に住む少数の人々の生活を見上げることさえ許されない無数の下層階級が対象とされていたのである。

その間の経緯の詳細な叙述は避けて、ここでペスタロッチの最後の作品ともいべき「祖国と教育についてのランゲンタールの講演」^{注17} „Rede in Langenthal.” (1862年)をさきの「アギス」に対比し、晩年のかれの思想を考察し思想上の発展をあきらかにしておこう。この講演はかれが学生のころ属していたスイス協会の会長に選出されたその席上でなされたものであり、そこには「アギス」の思想にも似た協会設立当時の理想が顕著に示されている。

すなわち、「講演」においてペスタロッチは、まず祖国スイスの伝統について次のように述べ

ている。それは自由と権利の尊重、都市や王侯領や町村の共同精神（Gemeingeist）と祖国愛（Vaterlandsliebe）であり、その根底をなす「単純と無邪気と高潔心により各カントンは地方の幸福と権利を基礎として」スイス連邦を成立させたのであった。その後^{注18}多くの民衆のうちに「祖国の市民力（Bürgerkraft）や市民道徳（Bürgertugend）がたえず継承され」、かくして「家庭の幸福と市民としての自主性に対するスイスの諸階層や諸個人の自己配慮（Selbstsorge）はながく祖国に続いた」のである。民衆の経済状態は節制と勤労^{注19}により安定し、幸福な生活であった。

しかしこうした国家秩序の安定は、国外からの種々の悪影響により崩壊し始めた。それには外国との政治的關係、すなわち専制政治形態の模倣や外国への軍事的援助があげられるが、とくに当時の支配者や民衆の道徳的退廃の原因として、ペスタロッチは商業の発展にともなう貨幣経済の発達や、工業の国内移入による財産の不平等を重視している。「あらゆる面から不自然な方法で、以前の状態とは対照的に莫大な金銭が流れこんだ。以前幸福だった大多数の市民は、急速に富んだ製造業者やその他の幸福な権力の寵児たちのそばで一種の屈從的な衰退を示し始めた。それにより旧い市民の共同生活の精神は悪影響を受け、それと同時に多くの無力者や同胞市民は浪費生活へと誘惑された」。農村の受けた弊害はいっそう大きく、無産化し負債を負った農民は「浪費と濫費と将来や後世への無配慮」へと陥ったのである。かかる状況のなかで^{注20}スイスの旧い家庭生活の宗教的道徳的基礎も根底から破壊され、いまや「旧スイスの思维様式・行動様式・生活様式の減退」が顕著になってきている。^{注21}

バルト（H. Barth）も指摘するように、ペスタロッチは「スイスの歴史を根源的秩序が崩壊していく過程とみなしており」、したがってペスタロッチにとり「旧スイスの祖国精神・共同精神をわれわれすべてのうちに等しく再建するよう努力しなければならない」という課題が生ずるのである。それは宗教的・道徳的、また

経済的・法的な秩序の再建であり、人間の自己保存と独立とを法的に守り経済的に保証するような社会で生活する限りにおいてそれは可能とされる。かかる旧スイス精神再建の最初の試みとしてペスタロッチは宗教改革をあげている。「この宗教改革の時期はそれに関係のある諸都市の旧市民的・旧スイスの精神を復活させ強化した」。ペスタロッチは宗教改革の本質を信仰の自由すなわち宗教的な確信の自己決断と良心の自由のうちに求め、信仰の自由を「われわれの憲法の本来の形式」に特有な政治的自由と結合させている。「われわれがいまや闘い取らねばならなかった信仰の自由は、われわれの祖先が闘い取ったあの市民的自由ときわめてよく一致していた。そこでわれわれすべての階級の市民的な思维様式・行動様式が、この時期において崇高で自由で強力で普遍的な国民精神に再び近づいたのである」。ペスタロッチはまた宗教改革を経済発展と関係させ、宗教改革が国民の福祉の増大に貢献したことを示した。しかしこの宗教改革さえ旧い精神の崩壊過程を阻止することができなかったのである。^{注22}

そして現実にはナポレオン専制政治が没落し、その支配から解放されたスイスにおいては新憲法が制定され「われわれは外的には救われ再び独立の状態におかれている」という事態にあり、^{注23}ペスタロッチはそのように形式的には独立したスイス国民にとり「内的に再建すること」„innerlich wieder herzustellen”が必要であると説く。かれはこの講演の序文で、「とくに、基礎薄弱な産業の結果道徳的・精神的・身体的・経済的な面で危険な状態におかれている国において、教育が何をなするか、また何をなすべきかという観点から眺めてほしい」と断っているように、旧い精神と秩序の再建^{注24}すなわち道徳的・精神的・経済的独立の道を教育に求めたのである。かれの教育研究はそれに貢献するためのものであった。しかもペスタロッチはかかる教育をあらゆる階層、とくに増大した無産者にも広く与えるべきことを要求し、「祖国よそれを叡知と愛と無欲のスイス精神でかれらに与えよ」と叫んでこの講演を結んでいる。^{注25}

これを「アギス」と比較すると、両者等しく社会の不平等と民衆の道徳的退廃を問題にし、その解決策として旧い秩序の内的精神の再建を希求しつつも、その間には大きな思想上の展開をみることができる。「アギス」では支配階級における悪の認識が第一義的であり、それゆえ事態の解決は有能な支配者の善政という方向で示されている。それはいわば上から(von oben)の民衆救済ともいうべきであり、そのため支配者に対しては叡知と高い道徳性が要求されるのである。それは古代都市国家のごとき共同体においては可能であるかも知れないが、「講演」におけるスイス連邦は複数的な国家であり、そこでは多元的な権力関係により解決はいっそう複雑化し現実はずでに単なる支配者の善意に期待するにはあまりにも厳しくなっている。それはペスタロッチの生きた時代の絶対専制政治の如実に示すところでもある。そこで「講演」では憲法という外的な秩序と共に、人間の本质と時代の要求に適合した教育による個人の内的・外的(道徳的・精神的・法律的・経済的)独立が民衆の幸福の源泉と考えられるに至った。社会秩序の崩壊はすべての階層にみられ、ペスタロッチはかかる民衆自身の独立なしにはかれらの幸福と社会の秩序は約束できないと考え、それを民衆の教育に求めたのである。それはまた産業革命と人権意識の高揚により、民衆が大きく歴史の前面にクローズアップされてきた当時の状況をも示すものである。

もちろんわたくしは、「アギス」から「講演」への思想的展開を政治から教育へと図式化し、ペスタロッチにおける教育立国論を説こうとは思わない。支配者に道徳性を要求し法律の復活により民衆の精神的再興を希願している点は広義に解すれば極めて教育的な理想であり、逆に民衆教育の実現を祖国に呼びかけるときそこには当然政治的配慮が必要とされる。とくにペスタロッチは青年時代から政治への関心が強く、また啓蒙主義と国民教育が時代の要求でもあり、それだけにいっそうペスタロッチの思想を研究するばあい政治と教育の関係は複雑である。その点バルトがペスタロッチの著作は常に

「政治の相」„Aspekt der Politik’ と「教育の相」„Aspekt der Pädagogik’ からみるべきだと説くのは重要な示唆を含むことばであるといえるであろう。

ペスタロッチ^{註31}の教育思想の本質的解明は、かれの政治思想・社会思想との関連を観過しては不可能である。なぜなら当時は政治的・社会的に世界史の激動期にあたり、近代思想の萌芽期でもあり、実践家としてのペスタロッチはそれを敏感に受けとって広い視野において教育的思索を深めていったからである。混沌とした政治情勢の中で教育はその本来の機能を見失いがちな昨今、教育が社会に対し政治に対し何をなするか、また何をなすべきかという重要な課題をもしペスタロッチに求めるとするならば、ペスタロッチにおける政治思想と教育思想の構造的連関と、歴史的变化にともなうその発展過程の十分な理解なしにはそれは不可能であろう。以上のような視点に立ってわたくしは今後の論述を進めて行くことにしたい。

〔注〕

1. 参考文献

「スイス史」シャルル・ジリヤール著 江口清訳(白水社)

「中欧史」(スイス編)今来陸郎編(山川出版社)

「スイス」A. シーグフリード著 吉阪俊蔵訳(岩波書店)

「ペスタロッチー伝」モルフ著 長田新訳(岩波書店)

2. 「ペスタロッチ伝」ドウ・ガン著 新堀通也訳 15頁。

3. „Schwanengesang“ H. Pestalozzis gesammelte Werke 10. Bd., hrsg. v. E. Bosshart, E. Dejung, L. Kempfer u. H. Stettbacher. X. s. s. 488~489.

4. 「ペスタロッチー伝」長田新著 上巻 49頁。

5. „Schwanengesang.” X. s. s. 497~498.

6. a. a. O. s. 500.

7. Pestalozzis sämtliche Werke, hrsg. v. A. Buchenan, E. Spranger u. H. Stettbacher. (Kritische Ausgabe) I. s. 4.

8. a. a. O. s. 5.

9. a. a. O. s. 3.

10. A. Heubbaum; „J. Heinr. Pestalozzi.” (1923)

- s. 21.
11. Kritische Ausgabe. I. s. 8.
 12. a. a. O. s. 8.
 13. a. a. O. s. 11.
 14. „Wie Gertrud ihre Kinder lehrt.” 10B d. IX. s. s. 49~50.
 15. B. Lehman; „Die Wandlung der Gedanken Pestalozzis über Volkserziehung”. (1920) s. 3.
 16. 10Bd. IX. s. 49.
 17. a. a. O. s. s. 141~142.
 18. 10 Bd. VII. s. 476.
 19. a. a. O. s. 479.
 20. a. a. O. s. 496.
 21. a. a. O. s. 496.
 22. a. a. O. s. 482.
 23. H. Barth; „Pestalozzis Philosophie der Politik.” (1954). s. 32.
 24. 10 Bd. VII. s. 511.
 25. a. a. O. s. 485.
 26. a. a. O. s. 485.
 27. 拙稿「ペスタロッチの国民教育論— „An die Unschuld” を中心に—」(島根大学論集 教育科学 第10号)第一章参照。
 28. 10 Bd. VII. s. 511.
 29. a. a. O. s. 473.
 30. a. a. O. s. 515.
 31. H. Barth; a. a. O. s. 24.

第一章 親心・子心の調和的世界

「神の親心と人間の子心、君主の親心と民衆の子心、すべての幸福の源泉」。¹ „Vatersinn Gottes; Kindersinn der Menschen, Vatersinn des Fürsten; Kindersinn der Bürger. Quellen aller Glückseligkeit.”

これは「隠者の夕暮」„Die Abendstunde eines Einsiedlers.” (1781年)の冒頭にある有名なことばであり、それをあえて本章の最初にあげたのはわたしの主題とするペスタロッチの初期の思想の中核がこの短いことばのうちに包含されているからである。それはおよそ次のようにいうことができよう。神は人類の父 (Vater der Menschen) であり、すべての人間は等しく神の子 (Kind der Gottheit) である。神の子

としての人間は神の祝福を受けており、神を信じ神に感謝する。そしてこのような神と人間の関係は国家における君主と国民の関係として実現されるべきであり、神の愛と君主の愛を受けてはじめて民衆は幸福な生活を送ることができるのである。

さてこのような根本理念を念頭においてペスタロッチの思想を考察していくばあい、かれが上記のことばに続いて「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭にあっても互に等しい人間、真の人間というこの人間とはいったい何か」と問いかけ、「何をかれは必要とし、何がかれを向上させ、また何がかれを低下させ、何がかれに力を与え、何がかれの力を奪うのか」と、人間の²本質、人間の腐敗墮落の原因と教化向上の道を求めているように、まずかれの人間観を明確にしておかなければならない。それは人類が永い歴史にわたって求めてきた課題でもあり、周知のように当時においてもカントは理性 (Vernunft) を、フィヒテは自我 (Ich) を、ヘーゲルは絶対的な精神 (Geist) を中心概念としてかれらの人間論を展開したのであるが、いまこれをデレカート (F. Delekat) によりペスタロッチに求めるならば、かれの人間論の中心概念は自然 (Natur) であるということが³できる。ところで自然観について簡単に眺めてみると、ルター (M. Luther) は自然を「低い、世俗的な、卑俗な、非神聖な、単に人間的なもの」として否定したのであるが、18世紀に入ると⁴ルターは「エミール」の中で「造物主の手を出る時は凡ての物が善であるが、人間の手に移されると凡ての物が悪くなってしまふ」と述べているように、神の所産としての自然を本源的な美と調和をそなえた純真無邪気なものとして讚美したのである。青年のころ「エミール」に熱中したペスタロッチもまた、かかる思想から出発していることはいうまでもない。

したがってペスタロッチは人間の教育を論じるにあたり、深く内面的な人間の本性に主眼をおき、「安らぎと静かなよろこびは人間陶冶の第一の目的である」、⁵「真理への人間の陶冶、汝は人間の⁶本質と人間の本性を静かな叡知へと陶

治することである』ということばにも示されているように、陶冶理想を内心の安らぎやよろこび、静かな叡知に求めたのである。それこそかれのいう「真理への人間の陶冶」である。しかもそれは人為的に外部から形成されるのではなく、それに至る道は人間の本性(Natur)に存在する。それをペスタロッチは「わたしの本性の内奥にこの真理への啓示がある」^{注7}、「人間よ、汝の本性の最も奥深いところに(im Innersten deiner Natur)真理と無邪気と単純とを、信仰と崇敬とをもって聴くものがある」と述べている。したがってこの「真理への道」^{注8} „Bahn zur Wahrheit” は「自然の道」 „Bahn der Natur” にほかならず、神から与えられた人間の本性をなす道ということができよう。換言すれば、人間には真理への陶冶可能な素質と過程とが本来的に与えられているのである。

このように人間の生命に安らぎをもたらし人間の素質や力を展開させる自然の道は、シュプランガー(E. Spranger)のことばを借りれば「神が事物と人間の生命に与えた永遠の秩序」であり、「神の秩序」 „oder de Dieu” である。ルソー同様ペスタロッチにおいても自然は神^{注9}の所産でありそれ自体神聖なものとされており、それゆえ合自然的な人間陶冶は確実であり精緻をきわめている。

しかもペスタロッチによれば、かかる自然の陶冶は「生活の立脚点、人間の個人的使命(Individualbestimmung)」^{注10}においてなされる。個々の人間は各自異った境遇や生活環境におかれているが、ペスタロッチは個々人の異った現実の中に人間陶冶の場をみいだしたのである。すべての人間が等しく神の子であるかぎり、いかなる地位やいかなる職業であろうと人間の内面には神から与えられた力と素質があり、個々の生活環境において人間性の陶冶がなされるのはけだし当然といえよう。

なおそのさいペスタロッチは、自発的・合自然的陶冶と共に、「自然はまた汝を外的関係のために外的関係により陶冶する」^{注11}とも述べているように、人間陶冶における外的条件を無視してはいない。人間陶冶における内的・自発的側

面と外的側面の両者を重視するペスタロッチの陶冶理論は、「内界と外界の相互作用」^{注12}というデレカートのことばによって要約することができよう。これをルソーの教育思想と比較するならば、ルソーもまた自然による教育、事物による教育、人間による教育の三つの側面を説きつつも人間の孤立的・抽象的自然状態の設定に終わっているのに対して、ペスタロッチは積極的に具体的で現実的な人間関係の中に人間陶冶の場を求めているといえる。その場はもっとも自然的でありすべての人間に普遍的な生活関係、すなわち家庭における親子の關係にほかならない。「人類の家庭的關係はもっとも重要な自然的關係である」^{注13}と説くペスタロッチにとり、家庭のもつ教育的意義は重要なものとなっている。すなわち家庭こそ「人類のすべての純粹な本性陶冶の基礎」^{注14}であり、「道徳と国家の学校である」^{注15}ということができる。ではそのような人間陶冶・国民陶冶の基礎としての家庭は子どもに何を形成するのか。

それについてペスタロッチは、「母親は幼児が義務とか感謝とかいう音声を発する以前に幼児のうちに感謝の本質をなす愛を形成し、また父親のパンを食べ父親と共に暖炉に身を暖める男児は、この自然の道において義務の中に存在のよろこびをみいだす」^{注16}と述べ、親の子どもに対する愛と配慮により子心がおのずと芽生えるという。その子心とは「単純と無邪気、愛と感謝に対する純粹な感情」^{注17}であり、かかる感情の教育こそペスタロッチの陶冶理想なのである。^{注18}

このような家庭における教育に人間諸力の発展の基礎があり、この基礎的・普遍的教育の上に立ってはじめて階級教育、職業教育、支配者教育、被支配者教育という特殊的教育がなされるのである。なぜならこれらの教育は「人類の特殊な地位および境遇における力と知慧の訓練、応用、使用」^{注19}であり、必然的に人類教育の普遍的目的の下位に立たざるをえないのである。すべての人間の本質的平等を唱えるペスタロッチが、地位や職業の如何を問わず等しく人間性の陶冶に必要なことを論じるのは当然といえる。かれは支配者と被支配者、富者と貧者の

存在は事実として認めつつも、たとえ高い地位であろうといかに富んでいようと人間性の陶冶を欠くならば人間として不完全であり、他方逆に賤しい小屋に住む貧しい人間といえども「陶冶された人間性」„die gebildete Menschlichkeit”をそなえているなら祝福され尊敬に価すると考えている。ここから必然的に、ペスタロッチは民衆にも民衆の支配者にも陶冶された人間性を要求していることを結論づけることができるのである。

ところでペスタロッチによれば家庭それ自体が教育的であるのではなく、かれの意味する外的関係による人間陶冶は、「神は人間にもっとも近い関係である」ということばによる人間教育へと内面化されざるをえない。すなわち人間は「家の父であり幸福の源泉である神」への信仰によってこそ「安らぎと知慧と力」を得ることができるのである。この信仰による人間陶冶の理念をわれわれはペスタロッチの次のことばのうちに明瞭に窺うことができよう。「神に対する信仰——生命の安らぎの源泉。生命の安らぎ——内的秩序の源泉。内的秩序——われわれの力の整然とした使用の源泉。われわれの力の使用における秩序——その生長と知慧にいたる陶冶の源泉。知慧——すべての人間の幸福の源泉」。神への信仰によりはじめて人間は真に祝福された生活を送ることができるのであり、上のような過程こそ自然の道ということができよう。それゆえその起点としての神への信仰は「人類教育の基礎としてわれわれの本性の内奥に存する」ということができる。しかもペスタロッチにとり「わが存在のもっとも奥深きにある神」„Gott im Innersten meines Wesen”ということばにみられるように、神はすべての人間のうちに等しく内在するのである。人間存在の中核は神であり、真理への人間陶冶は「かれのもっとも近い関係から出発し、しかも拡がるたびごとに真理のすべての幸福力の中心に還らなければならない」。このようにペスタロッチは人間の外的な生活圏 (Lebenskreis) の中核に神をおき、生活圏の拡大と共にたえず自己の内面へと帰還深化する求心的な円環構造を人間

存在の基本的な形式と考えているのである。

しかしペスタロッチは神への信仰を教会や聖書にではなく、家庭の教育に求めている。さきに述べたように、単純と無邪気、感謝と愛という純粋な感情は親心に恵まれた幼児のうちにこそ芽生えるのであり、しかもかかる「人間の純粋な子心において永遠の生命の希望が起こる」というかれの確信は、家庭における子心の形成が神の子としての子心の自覚を覚醒するということを意味するのである。ただそのさい、家庭の幸福を約束する親心・子心は神への信仰の結果であり、家庭における両親の親心は神の子として父なる神を信じることにより生まれてくることを観過してはならない。かくしてこそ「神の子であるわが父に対する信頼 (Glaube) が神への信仰をもたらし」と確言することができるのである。そこではじめて家庭における親子の関係は神聖視され、それを自然の秩序として尊重することが許される。かかる秩序の根元は「愛と信頼」にあり、それが親と子、神と人間を同時的に結合するのである。すなわちペスタロッチの思想において家庭が神の秩序として、現世における神の世界として讃美され、彼岸的な神の愛と此岸的な親の愛が同一視されているのであり、かかる汎愛論の立場をシュタイン (A. Stein) が「愛の一元論」„Monismus der Liebe”と呼ぶのは至当な表現である。

そして上のようなペスタロッチの家庭観は連続的にかれの国家観へと発展し、両者は同一の原理でつらぬかれている。すなわちかれによれば神に対する人間の子心は国家における同胞心 (Brudersinn) となり、国家の成員は愛により結合され、家庭の拡大された世界としての国家における支配者と民衆の関係は「君主の親心・民衆の子心」という宗教的關係とされる。ペスタロッチはそれを「君主の地位は神の似姿であり、民衆の父である。民衆の地位は君主の子であり、その君主は民衆と共に神の子である。人類の自然的關係のこの織物はなんと柔く強くそして美しいことよ」と述べ、国家における支配者と被支配者のこのような関係を自然の秩序として讃美しているのである。かれは人間は等し

く神の子として神の愛を受けると説きつつも、現実社会における人間の外的な差異は認め、しかもそれを包含する個々の境遇において各人が自己の使命を遂行することこそ自然の秩序に適合しているとみなす。自然の秩序は人間が「個人的使命」^{注32} „Individualbestimmung” の環から自由になることを許さず、ペスタロッチの強調する秩序の世界はそれゆえ歴史的には社会の現状維持的性格をおびているといえよう。その点既存の政治的秩序を否定し、自然的存在としての人間の権利の平等観から個人の自由な契約により社会を再構成しようとしたルソーの思想とは異なる。

もちろん青年のころルソーの思想に影響されたからとて両者が必ずしも同一であるとはかぎらない。いまわたしは両者の相異の一つについて、ペスタロッチが最初にルソーを批判した「育児日記」 „Tagebuch über die Erziehung des Sohnes” (1774年)により考察しておきたい。そこでペスタロッチはわが子ヤコブの教育にあたり「自由と服従」という問題に直面し、「エミール」におけるがごとき子どもの内面性の自由な発展を認めつつも、社会生活への顧慮から服従の必要なことを説き、「真理は一面的ではない。自由は一つの善であり服従もまた同様である。われわれはルソーが分離したものを結合しなければならぬ」と述べている。このような思想が「隠者の夕暮」^{注33}では子心や従順、積極的には義務として現われ、自然の秩序としての国家の秩序を維持する結果となっているのである。

すなわち、父なる支配者を尊敬し信頼し、支配者に感謝し服従することは民衆の義務であり、逆に民衆の父として民衆を愛し民衆の幸福に務めることが支配者の義務である。しかしペスタロッチの真の意図は民衆の幸福にあり、かれの初期の政治思想は「アギス」においてすでに論じたように支配者の民衆に対する親心の要求にまず向けられているのである。これを教育の次元において考えるなら、かれは民衆に幸福をもたらすものとして家庭教育、宗教教育の重要性を説きつつも、その鋒先は鋭く支配者教育

へと向けられているとみなすことができる。

そしてかかる支配者の親心は神に対する信仰により可能とされており、ペスタロッチは政治と宗教を密接に関係させているのである。もし支配者が神を信仰せず民衆に対する義務を怠り暴力により民衆を圧迫するなら、神聖な自然の秩序は乱れ国家は滅亡するであろう。民衆の幸福と国家の秩序を維持するのは政治の技術よりむしろ支配者の道徳性にある。「それなしには賢明な法律の響きも無用な人間の口先だけの隣人愛の響きに等しい」、「君主よ、世界の幸福は陶冶された人間性^{注34}にあり、ただこの人間性によってのみ啓蒙と知恵の力とすべての法律の内面的幸福が作用する」^{注35}。

ところでペスタロッチのいう神に対する義務や服従はけっして超越者の冷厳な命令や強制ではない。自己自身の内奥に神が存するかぎりそれは自己自身に対する義務であり服従であり、神の愛に抱かれた人間は隣人への愛にほかならない。その根底は家庭における親子の間の愛と信頼にあり、したがって国家は拡大された家庭であるといえよう。国家は家庭と同様現世における神の王国であり国家の秩序は神の秩序である。かくしてペスタロッチは家庭と国家とその背後にある神の世界との美しい調和を描き出している。これらを結ぶものは等しく愛でありペスタロッチの描く世界像は「愛の共同体」^{注36} „Liebesgemeinschaft” であるといっても過言ではない。

このような国家観をわれわれは宗教的国家観あるいは家族的國家観と呼ぶことができよう。そこでは支配者と被支配者とは支配服従という権力的関係でもなければ権利義務という近代的な契約関係でもなく、親心子心という宗教的關係であり親心が子心を覚醒するという広義の教育的関係である。シュベグラーはプラトンの国家観について「彼にとっては国家は一大教育機関、大規模な家庭にほかならない」と述べているが、共に貴族国家の限界内にある限りプラトンとペスタロッチには共通した響き^{注37}が感ぜられる。しかし善のイデアという超越的・普遍的な価値の実現に向って国家のすべてが統一されて

いるプラトンに比して、ペスタロッチのばあい出発点は日常的・個人的な家庭にあり、親子の愛を中核にしてすべてが美しく調和を保っているのである。その愛はもちろんプラトンのいうエロスではなくキリスト教的なアガペーであり、民衆の幸福を願うペスタロッチはそれを誰よりも当時の支配者に要求したのであった。

最後に、この章を結ぶにあたりわたくしはかつてのわが国の天皇制国家観を思い起こさざるをえない。そこでは天皇は神格化され国民の父と仰がれ、国民は天皇への絶対的服従を強制されていたのである。このような思想が形式的にはペスタロッチの国家観と近いものであるということはあきらかであり、それゆえ教育学者のうちにはペスタロッチの思想をもって天皇制絶対主義を正当化した人のいたことは十分考えられる。例えばある学者は「隠者の夕暮」について述べ「その親心子心を基調とするところ、吾が国の政治道徳と著しく相似たところがあるではないであろうか。吾が国においては皇室は国民の宗家であり、天皇は親心を以て国民を赤子として愛撫する。父子の情こそ天皇と吾等国民とを結ぶ紐帯であり、君主の親心臣民の子心が吾が国体の本義である」という。それがいかに誤りであるかは歴史の語るところからあきらかであり、われわれにはペスタロッチの思想を生み出しそれを支えた歴史的社会的条件とわが国の天皇制の科学的分析なくして両者を安易に結合することは許されない。もしペスタロッチから現在何かを学びうるすとするならかれのもつ思想の本質とその歴史的限界をまずはっきりと認識しなければならぬとわたくしは考える。(未完)

〔注〕

1. 10Bd. VIII. s. 1.
2. a. a. O. s. 1.
3. F. Delekat; „J. H. Pestalozzi.“ (1928). s. 101.
4. F. Delekat; a. a. O. s. 101.
5. 「エミール」平林初之輔訳(岩波文庫) 16頁。
6. 10Bd. VIII. s. 11.
7. a. a. O. s. S.
8. a. a. O. s. 6.
9. a. a. O. s. 14.
10. E. Spranger; „Pestalozzis Denkformen.“ (19

- 47). s. 35.
11. 10Bd. VIII. s. 4.
12. a. a. O. s. 9.
13. F. Delekat; a. a. O. s. 122.
14. A. Heubaum; „J. Heinr. Pestalozzi“ s. 71.
15. 10Bd. VIII. s. 9.
16. a. a. O. s. 10.
17. a. a. O. s. 2.
18. a. a. O. s. 13.
19. a. a. O. s. 8.
20. a. a. O. s. 8.
21. a. a. O. s. 11.
22. a. a. O. s. 11.
23. a. a. O. s. 12.
24. a. a. O. s. 12.
25. a. a. O. s. 12.
26. a. a. O. s. s. 2—3.
27. ナトルブはこれを一種の螺旋的な円環運動であるという。
P. Natorp; „Pestalozzi. Sein Leben und seine Ideen.“ (1919) . s. 51.
シュブランガーもまたこのような構造に注目し、「隠者の夕暮」におけるペスタロッチの根本的思維様式として「生活圏の理論」 „Die Theorie der Lebenskreise“ を論じている。それは一つの中心点から自己を拡大し、ふたたび自己へ還る思維様式であり、外的生活圏としては家庭、職場、国家、内的な生活圏としては神が考えられる。
E. Spranger; a. a. O. s. s. 34—35.
28. 10Bd. VIII. s. 13.
29. a. a. O. s. 15.
30. A. Stein; „Pestalozzi und die Kantische Philosophie.“ (1927) s. 4.
31. 10Bd. VIII. S. 16.
32. F. Delekat; a. a. O. s. s. 126—127.
33. Pestalozzis sämtliche Werke (12Bd) ed. L. W. Seyffarth. 3. s. 232.
34. 10Bd. VIII. s. 9.
35. a. a. O. s. 24.
36. A. Stein; a. a. O. s. 24.
37. 「西洋哲学史」(上) 谷川徹三、松村一人訳(岩波文庫) 177頁。
38. 「隠者の夕暮 シュタンツだより」長田新訳(岩波文庫) 解説 167頁。(昭和36年10月31日受理)